

小学校の走り高跳びの学習における学習者の認知研究

－ふきだし法による分析を通して－

渡辺 雄介（秋田大学大学院）

1. 目的

体育授業において、知識の習得は、技能の向上や協力して学習に取り組む態度の形成と相互に関連して重要なものと位置付けられている。構成主義の視点からは、学習者の学習内容は既存の知識の上に構築され、個人によりその様態が異なるとされている。特定の学習における学習者の認知を確かめることには意義がある。

研究の目的は、小学校段階の陸上運動領域である走り高跳びの学習において、単元を通して学習者が何を認知したのかを明らかにすることである。また、技能の異なる学習者の認知の差異を明らかにする。

2. 研究方法

1) 研究対象と授業計画

公立小学校6年生1クラス34名（男子17名女子17名）を対象に、全6時間の陸上運動領域（走り高跳び）の授業実践を行った。跳び方ははさみ跳びを指導した。学習者の認知を促進するため、はさみ跳びのポイントについて図や運動のリズムを示して指導し、タブレット端末を使用して跳躍を撮影しチェックする活動、学習カードに欄を設け走り高跳びの連続写真の下にコツを記入する活動を取り入れた。

2) データの収集と分析方法

授業に参加した全児童に対し、毎時間終了後にふきだし法（松本、2015）の質問調査紙への記入を依頼し、データ採取をした。データの分析は、KJ法によるマッピングを行い概念図化した。また、児童を技能別に上位児（ $n=7$ ）、中位児（ $n=23$ ）、下位児（ $n=4$ ）に分類し、それぞれのデータの分析を行った。分析作業は大学院で保健体育を専攻する本研究者が単独で行い、その後大学において体育科教育を担当する教員1名、教職経験30年（内小学校勤務7年）の中学校保健体育教諭1名が検討し修正を行った（研究者のトライアングレーション）。

3. 結果と考察

- 1) 単元全体の分析結果として、380の記述が採取され、8つの大概念が抽出された。大概念として整理されたのは、「走り高跳びの技術」、「コツ」、「走り高跳びを知る」、「記録」、「歴史」、「跳躍時の心理」、「学習」、「その他」であった。走り高跳びの技術についての記述が最も多く、多種であり、各局面でのポイントやそれができていたかどうか自己評価する記述が含まれていた。
- 2) 走り高跳びの技術について、中位児は踏み切りへの意識があるが、上位・下位児には少なかった。上位児は踏み切りの課題を既にクリアし、下位児はバーを越えることに意識があって踏み切りまで意識が向いていなかった。
- 3) 跳躍時の心理については、中位・下位児は跳ぶことへの恐怖心をもっていたのに対し、上位児は恐怖心を感じていなかったことが分かった。

4. 結論

小学校6年生の走り高跳びの授業において、学習者は走り高跳びの技術の面で、助走、踏み切り、跳び方について多種の気付きを得ていた。技能の中位児は踏み切りへの意識があるが、上位児と下位児は踏み切りへの意識が薄いという特徴があった。心理面では、上位児には恐怖心に関する記述がみられなかったが、中位児や下位児にはみられた。下位児に対する踏み切りへの意識付けを行うことや、中位児及び下位児に対する恐怖心を取り除くための個別的な指導を充実させることの必要性が示された。

5. 主な参考文献

- 1) 松本奈緒（2015）中学校段階の体ほぐしの運動における学習者の概念形成—ふきだし法による自由記述とインタビュー分析を通して—。体育科教育学研究 31（2）：1-16。